皇后陛下御歌

三十年（みそとせ）へて君と訪（と）いたる英国の学び舎（や）に思ふかの日々の夢

季刊誌「皇室」106号（日本文化興隆財団企画・扶桑社刊）から転載

歌会始お題「夢」

目次

歌会始め 1
栃木県神社庁庁長ご挨拶 2
栃木県神社庁教化委員会委員長ご挨拶 3
特集記事
「大東亜戦争終結八十年を迎えて」 4
受彰者紹介 8
神宮式年遷宮啓発について 11
栃木県神社庁新役員・監事・支部長・顧問・参与・協議員紹介 16
栃木県神社庁教化委員会役員委員紹介 17
神話天孫降臨・三種の神器について 18
栃木県のお祭りと伝統行事 22
伊勢の神宮と氏神さまのお神札（ふだ）をおまつりしましょう 26
令和八年厄年・方位・戌の日早見表 28
祝祭日ポスター 29
編集後記 29

栃木県神社庁庁長　ご挨拶

日光二荒山神社
宮司　中麿　輝美

今年は六月中旬以降猛暑が続き七月に入ると各地で雨の被害が報じられており、地球温暖化の影響か日本独特の四季の良さがなくなってきているようであり、先人たちの教えに倣い、大自然の神々に更なる敬虔（けいけん）な祈りを捧げなければならないと感じられるこの頃であります。

本年は、昭和百年、戦後八十年の節目の年を迎えましたが、私も振り返ってみると國學院大學に入学の折、昭和三十九年東京オリンピック開催の年で、神社本庁学生寮に入る際には、第二次大戦中から戦後にかけて米穀不足から政府が統制の為に各世帯に配布した、米穀通帳を持参しなければならない時代でしたので、昭和は遠くなったと感じますが忘れてはいけない多くの物事があったことも事実であります。

天皇皇后両陛下には、戦後八十年を迎えるに当たり激戦地の硫黄島、愛子内親王殿下と共に沖縄、原爆の投下された広島・長崎に慰霊の旅を続けられており、大御心に対し私達も護國の英霊たちの国を思い尊い命を捧げられたその真心を継承しなければならない義務があります。

靖國神社、護國神社への参拝を奨励することはもとより、現在、栃木縣護國神社を支援すべく教化委員会において八月十三日に「万灯の夕べ」を、青年神職むすび会においては英霊顕彰事業として、八月二十五日に「戦没者遺族会との語りべ研修会」を企画し、実践されましたこと誠に心強く、この機に年々薄れていく御祭神の思いを広く知らしめることが大切であると思います。

本宗と仰ぐ神宮につきましては、第六十三回式年遷宮諸祭典の始めを飾る、山口祭、木本祭、御杣始祭が古式ゆかしく斎行され、愈々準備が本格的に進められており、来年の「第一次お木曳行事」の募集が始まり間もなく奉賛会の設立が成されると思います。

古来皇家第一の重事、神宮無双の大営とされておりました式年遷宮の機運を盛り上げる事は勿論でありますが、現在、減体傾向の神宮大麻頒布につきましては、一体でも多くの人々にはもとより、いかに現状を維持するか、十月二日には神宮大麻・暦頒布始奉告祭を執行し、頒布が始まりますが神宮奉賛の真心を以て努力を怠ることなく奉仕に専念することが務めであると自覚しなければなりません。

現在神社界を取り巻く諸情勢は地方の過疎化、少子高齢化の深刻さが増している状況にありますが、古来より連綿と継承されてまいりました神社の信仰を守り伝えるために、祭祀の厳修を第一義に、神意の奉行を地域社会に実践していくことが神社人にとっての使命でありますので、今後共神職と氏子総代の皆様方と手を携えて諸問題に取り組んでいく事が肝要であると思います。

何卒斯界発展の為に今後更なるご支援、ご協力の程宜しくお願い申上げますと共に、奉務神社の益々のご隆昌と皆々様のご健勝を祈念致しましてご挨拶といたします。

栃木県神社庁教化委員会委員長 ご挨拶

八雲神社
宮　司　小堀　真洋

皇室を戴く吾が日本は、世界に誇る永い歴史を持つ国です。畏くも天皇陛下が日々ご公務・皇室祭祀にご精励遊ばされておりますこと、ご同慶の至りに存じます。皇室の弥栄をご祈念申し上げます。そして、皇室の氏神であり、日本国民の総氏神とも称えられます伊勢の神宮におかれましては、諸祭恙無く斎行され、式年遷宮に纏わる諸祭典・行事も始まりました。慶賀に存じます。

この度、栃木県神社庁教化委員会改選にあたり、前香取正義委員長の後任として令和七年より三年間の教化委員長に選任されました。副委員長には三祖神社（宇都宮市）宮司の阿久津喜大氏と賀茂別雷神社（佐野市）禰宜の毛利晴喜氏、また、総務部門長に日光二荒山神社権禰宜の和氣洋誠氏、調査研究部門長に津島神社（高根沢町）禰宜の岩松史恵氏、教化育成部門長に大前神社（真岡市）禰宜の柳田耕史氏、編集部門長に伊勢神社（足利市）宮司の提箸照之氏が選任されました。各部門長は積極的で実務能力、実施能力に長けた方々で、頼もしく、楽しみに思っています。教化委員会の活動は、社務の傍らに行われます。時間的な制約の中の活動であり苦労もあると思いますが、総会や部門会議、懇親会などは、大いに議論を交わし、「たのしみ」を感じながら取り組むことで、神社庁の活動にも、委員各位にも、意義深き活動の場となることと思います。神職・氏子総代の皆さまには事業へのご協力をよろしくお願いいたします。

さて、私たちの日常に目を向ければ、世の変容をもたらしたコロナウイルスの影響はほぼ無くなりました。その期間を過ぎて、外国人が多く国内に訪れて、観光地は活況を呈し、好循環と社会問題の側面が表れ、斯界への影響も大きくなってきました。日本国民のみならず、世界中の人々が、日本の象徴として訪問先に神社を選び訪れています。信仰に無頓着と自負する日本国民ではありますが、外国から日本を見たとき、社寺を中心とする宗教施設の多さと、宗教を起源にもつ年中行事を大切にし、祖先の御霊に末永く寄り添う風習を目の当たりにし、信仰心の篤い日本人の国民性を発見するそうです。かたや日本人自身は無自覚であるが故に、その根源が神道にあることに気付くこと無く「自由に解釈するを良し」としています。そのため、氏子の祭祀への取り組みは、氏子本位の運営が多くなり、更にコロナ禍を経て「祭」を縮小運営する神社も増えてきてしまいました。

令和七年度後期のＮＨＫ連続テレビ小説は小泉八雲ことラフカディオ・ハーンが関係する「ばけばけ」です。彼は、神道的な霊魂観に基づく、現世と幽世の境界線の曖昧さを「日本人の気質」として見抜きました。この機会に、日本の多くの文化や歴史が神道に根付いていることを広く知らしめ、更にはその根源である神道に興味を持っていただいたり、神道について紐解く人を生み出したりすることができれば、自宅に神棚をそなえて正式な形で家庭に神棚をまつる方を増やすことにつながることでしょう。ひいては、地域のお祭も本質を見定めて、御祭神本位の祭典を行う氏子崇敬者の増加や祭典奉仕に繋がることと思います。

また、本年は終戦八十年を迎えます。靖國神社・栃木縣護國神社をはじめ各県護国神社や招魂社での英霊の御霊まつりが末永く営まれますよう、いつまでも英霊に寄り添う心を養えるよう、私たちも力を尽くしてまいりましょう。

結びに栃木県内神職、神社総代様をはじめ氏子崇敬者の方々のご健康とご多幸を心よりご祈念申し上げ、ご挨拶とさせていただきます。

特集　大東亜戦争終結八十年を迎えて

本年は大東亜戦争終結八十年。先の大戦では若い尊い生命を国や家族のため捧げられた英霊等によって、今の祖国日本がこのように発展して来ている事を再認識し、更なる不戦を誓い、真心からの追悼の誠を捧げなくてはなりません。今号では、栃木縣護國神社宮司　稲寿久様の特別寄稿、栃木県内の主な護國神社・招魂社の紹介、八月十三日に栃木縣護國神社に於いて斎行された「英霊に捧ぐ　万灯の夕べ」にて、栃木県神社庁教化委員会の英霊顕彰事業を紹介致します。

全国に五十二社鎮座する護國神社は、日本を守るために戦没された二百四十六万余柱のみたまをお祀りし日々平和を祈念しています。ぜひ、それぞれの地域に鎮座する護國神社・招魂社にお参りしましょう。

終戦 80 年 栃木縣護國神社 みたま祭り・戦没者追悼平和祈願祭チラシ

戦後八十年を迎えて

栃木縣護國神社
宮司　稲　寿久

昭和二十年八月十五日は我々日本人にとって忘れてはいけない日となりました。ラジオから流れる「玉音放送」を前に多くの国民が敗戦の悔しさとこれからの日々の不安、戦争が終わった安堵感、など計り知れない虚無の中から立ち上がってきました。現在の平和で豊かな生活は、多くの犠牲の上にあります。戦後荒廃の中で、帰還した戦友やご遺族、すべての国民が、御英霊への感謝と奉賛のなか復興を果たしてきました。

終戦八十年を迎える今年、天皇皇后両陛下におかせられましては、「慰霊の旅」として、玉砕の地硫黄島（いおうとう）・沖縄県、原爆の被害を受けた広島県・長崎県を行幸啓遊ばされました。また七月六日には国賓としてモンゴルをご訪問され、抑留慰霊の碑に献花をされました。大東亜戦争の敗戦後、旧ソ連によって多くの日本人がシベリアなどに抑留されました。モンゴルには約一万四千人が移送されて、一千七百人以上が命を落としました。雨の中、両陛下が黙祷をするお姿、程なく雨が上がりお帰りの際に再度振り返り拝礼なされました。

また、平成の時代には　現上皇上皇后陛下におかれましても、終戦六十年には、サイパン島へ中部太平洋戦没者の碑に、戦後七十年には、

パラオ共和国ペリリュー島の西太平洋戦没者の碑にて献花された後、はるかに臨む玉砕の地アンガウル島にもご拝礼されました。アンガウル島は水戸・高崎・宇都宮で編成され多数の本県出身の御英霊が亡くなっております。

先の大戦では、三百十万人の多くの国民が亡くなり、戦後を歩まれて来られた両陛下にとって、この慰霊の旅は、常に国民に寄り添い、国の為に命を落とされた御英霊に御心をお寄せになられるお姿は、私たちの記憶に深く刻まれることとなりました。

戦後、働き盛りの息子を亡くし家の大黒柱を失い苦労を強いられた父母兄弟、亡き夫を思い女手一つで子供を抱え苦労して育ててきた妻、生まれる前に父を亡くし、写真だけの記憶しかない遺児（戦没者の子供たち）も数多く存在します。終戦八十年の現在、当然親は亡くなり妻も生きていれば、百才を越えており　遺児の平均年齢も八十七歳。戦争の記憶も遠い歴史になろうとしております。十年前の終戦七十年時点で、厚労省の統計によると戦没者遺族の数は、全国の戦没者の親が七人　戦没者の妻が七万人　遺児が百万人と言われていました。

戦後二十年経った昭和四十年を過ぎた頃は、各地の多くの戦友会が慰霊団を組み、戦地に出向き、亡き戦友に祈りを捧げ、帰国後、護國神社に記念碑を建立、戦友会主催で慰霊祭を斎行してきましたが、終戦五十年ごろより高齢化が進み戦友会・傷痍軍人会・軍恩連盟など解散に至り戦争体験者の話を聞く機会が減ってきてしまいました。

私も、昭和五十六年に栃木縣護國神社に奉職以来、沖縄をはじめ、何度も海外戦没地に出向き慰霊祭を斎行してきました。現地にて祭壇の準備をし、慰霊祭を斎行、慰霊祭詞ののちに各遺族の方々が、祭壇の正面に進み、追悼文を広げると暫く声をたてず嗚咽が聞こえ、やっと家族に会えたという気持ちが高まり、震える声で読み上げる姿を何度も見てきました。遺骨の戻らない現地での慰霊祭は、遺族にとってかけがえのない祈りの場所となっていました。

毎年続いた、東部ニューギニアでの慰霊の旅も昨年で一区切りをつけることとなりました。世界に目を向けると頻繁に起こる自然災害、各国同士の紛争、終焉の見えない戦争が一刻でも早く終結することを願っております。節目の年を迎えた今こそ、戦争の記憶の継承と恒久平和を願う場としてご奉仕を続けていく覚悟です。

戦争で亡くなった多くの御英霊は今この日本を見てどんな思いをしているのだろうか。これからも、御皇室の安泰と、平和が一日でも早く訪れることを願い、挨拶に代えさせていただきます。

東部ニューギニア　ウエワク平和公園慰霊祭

同　ウエワク平和公園慰霊祭

同　モロネ地区戦没者慰霊祭

いずれも令和６年 11 月斎行

栃木県内の主な護國神社・招魂社

栃木県内には、戦没者や国家に殉じた方々の霊を祀る「護國神社」や、その前身・役割を持つ「招魂社（しょうこんしゃ）」がいくつか存在します。

●栃木縣護國神社

○所在地：栃木県宇都宮市陽西町一ー三七

御祭神：国家公共に尽くされた英霊の神霊（栃木県出身の戦没者）

明治五年（一八七二年）に旧宇都宮藩知事（最後の藩主）戸田忠友らにより「宇都宮招魂社」として創建されました。当初は戊辰戦争で殉じた旧藩主戸田忠恕（ただおき）公とその臣下など九七柱の英霊を祀っていましたが、明治八年（一八七五年）には官祭招魂社となり、西南戦争、日清戦争、日露戦争など、数々の戦役における栃木県出身の殉国の英霊も合祀されるようになりました。昭和十四年（一九三九年）に「栃木縣護國神社」と改称され、現在の場所に移転しました。現在、大東亜戦争等を含む各種戦役における栃木県戦没者五五、三六一柱を祀っています。

●黒羽（くろばね）神社（黒羽招魂社・黒羽護國神社）

○所在地：栃木県大田原市黒羽田町四九三

明治二年（一八六九年）に黒羽藩主大関増勤（ますとし）公により、戊辰戦争の戦没者四七名の霊を祀るため「黒羽招魂社」として創建されました。栃木県内二社しか指定されなかった官祭招魂社の一社です（もう一社は栃木縣護國神社）。昭和十四年（一九三九年）に「黒羽護國神社」と改称されましたが、現在は「黒羽神社」としています。戊辰戦争以来の戦没者一、九三八柱を祀っています。

●大田原護國神社（大田原神社内）

○所在地：栃木県大田原市山の手二ー二〇三八（大田原神社内）

明治十一年（一八七八年）に大田原藩の戊辰戦争戦没者を奉斎したのが起源です。戊辰戦争以来の戦没者を祀っています。東日本大震災で全壊しましたが、大田原神社に祠が再建されました。

●錦着山（きんちゃくさん）護國神社

○所在地：栃木県栃木市箱森町一五一七（錦着山山頂）

栃木県庁が栃木市にあった明治十二年（一八七九年）に、西南戦争戦没者を祀って創建されました。幕末以来の旧下都賀郡地域の戦没者を祀っています。

●藤原町（ふじはらまち）護國神社

○所在地：栃木県日光市鬼怒川温泉滝八三四ー四五

昭和二十八年（一九五三年）創建。日清戦争以来の旧藤原町出身の戦没者二五六柱を祀っています。

●西大芦（にしおおあし）護國神社

○所在地：栃木県鹿沼市草久四三五ー二

昭和三十二年（一九五七年）創建。日清戦争以来の村内戦没者一二一柱を祀っています。

上記以外にも、地区の戦没者を祀る「招魂社」が鹿沼市上日向（かみひなた）や宇都宮市上田原町、佐野市などに存在します。また、忠魂碑や慰霊碑といった形で、戦没者を慰霊する施設が県内各地にあります。

これらの護國神社や招魂社は、郷土の発展と平和のために命を捧げた英霊を祀り、その功績を顕彰し、恒久平和を祈念する重要な場所となっています。

教化委員会・むすび会　雪洞の設置

栃木縣護國神社
みたま祭り
『英霊に捧ぐ 万灯の夕べ』
八月十三日
戦没者追悼式（終戦八十年臨時大祭）
八月十五日

護國の杜を照らす雪洞

雪洞に献灯

戦没者追悼式（終戦八十年臨時大祭）宮司祝詞奏上

稲宮司と参列員代表者

御社殿前に奉納された雪洞

戦没者追悼式（終戦八十年臨時大祭）多くの参列遺族

栃木県遺族連合会　木村好文会長 追悼文奏上

令和六年度
栃木県神社庁長臨時表彰受彰者

塩谷　金井神社責任役員　斎藤　文男
（宮司　荒井　清勝）

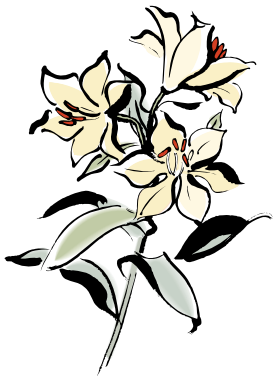
北那須　黒磯神社総代　守山　彌
（宮司　津田　亮）

下都賀　鷲宮神社氏子総代会会長　根本　勤
（宮司　菱沼　拓己）

下都賀　鷲宮神社氏子総代会副会長　篠崎　恒夫
（宮司　菱沼　拓己）

下都賀　東明神社総代　福田　利雄
（宮司　小林　靖）

足利　稲荷神社責任役員　籾山　公治
（宮司　櫻木　理史）



金品奉納にて受彰された方々

御影石製春日灯篭一対
八幡宮（下野市）
伊澤　剛・和子
（宮司　小島　教敬）

祈祷太鼓
塩竈神社（矢板市）
大谷津　勢伊智
（宮司　伊藤　史展）

鉄鋼舞台
愛宕神社（那須塩原市）
（有）小阪製作所
（宮司　相馬　秀和）

神前幕
愛宕神社（那須塩原市）
塩川　実
（宮司　相馬　秀和）

拝殿神前幕

乃木神社（那須塩原市）
宮沢建設株式会社
代表取締役　宮澤　卓也
（宮司　渡　健二）

末社　朋友神社御簾

日光二荒山神社（日光市）
星野　弘昌
（宮司　中麿　輝美）

境内整備事業

大宮神社（西方町）
石川左官工業所
代表　石川　好夫
（宮司　黒本　裕子）

大鳥居社号額

大宮神社（西方町）
福田　眞一・久子
（宮司　黒本　裕子）

境内整備事業

大宮神社（西方町）
大和砕石産業（株）
代表取締役　岡　忠昭
（宮司　黒本　裕子）

胡床三十脚

喜久澤神社（鹿沼市）
鈴木　道夫
（宮司　田邉　一丸）

胡床三十脚

喜久澤神社（鹿沼市）
安田　博
（宮司　田邉　一丸）

LED電気工事一式

春日神社（栃木市）
新村電設有限会社
（宮司　板垣　彰）

アルミ製灯篭一基

春日神社（栃木市）
富山　俊男・恵子
（宮司　板垣　彰）

アルミ製灯篭一基

春日神社（栃木市）
大坂屋運送株式会社
（宮司　板垣　彰）

鳥居

篠塚稲荷神社（小山市）
㈲長工務店　代表　長　朗
（宮司　櫻木　琢也）

多額の浄財寄進

稲荷神社（足利市）
株式会社　マルサン
代表取締役　樋口　日里
（宮司　櫻木　理史）

第六十三回 神宮式年遷宮

～最も古く、最も新しい～『御用材のお祭り』

伊勢神社
宮司　提箸　照之

御樋代木奉曳式（陸曳き）

式年遷宮

正式には「神宮式年遷宮」と言います。「式年」とは定められた年、「遷宮」は宮を遷すこと。二十年に一度、皇大神宮（内宮）・豊受大神宮（外宮）の御正殿をはじめ、御装束や御神宝などをすべて新しく造り替え、神様に新しいお宮にお遷りいただくお祭りです。東西に隣接する同じ広さの敷地に式年遷宮のたびに交互に御社殿が建てられます。およそ一三〇〇年前、持統天皇四年（六九〇）に始まり、平成二十五年（二〇一三）には第六十二回式年遷宮が行われました。令和六年四月、天皇陛下から御聴許を賜り、伊勢の神宮では令和十五年（二〇三三）の第六十三回式年遷宮に向けて準備を開始しました。

遷宮諸祭

平成二十五年に厳粛の内に執り行われた両正宮と両第一別宮の遷御も麗しく完遂し、第六十二回神宮式年遷宮は終了しました。式年遷宮の諸祭は山口祭をスタートに三十あるとされますが、この数字は皇大神宮の祭典の数であり、豊受大神宮以下十四別宮の祭典も含む総数は二百九十六にも及びます。

諸祭は大きく分けて御用材を伐採して運ぶ、**「御用材のお祭り」**、立柱祭や上棟祭ように御社殿を造営する**「造営のお祭り」**、遷御を中心に大御神に新宮にお遷り戴くための**「遷御のお祭り」**の三種類があります。

今号は、令和七年から九年に執り行われる「御用材のお祭り」を紹介します。

山口祭（やまぐちさい）

先ず遷宮のお祭りは、山の口、入口から。社殿の造営に用いる御用材（檜）を伐り出すにあたって、古くから内宮は神路山（かみじやま）、外宮は高倉山の「山の口に坐す神」をお祀りするといいます。作業の安全を祈る祭儀をまず行います。祭典の日時は天皇陛下の御治定（ごじじょう）を仰ぎ、令和七年五月二日に皇大神宮は午前八時、豊受大神宮は正午とお定めになりました。

祭儀は、まず皇大神宮に式年造営庁総裁（大宮司）、技術総監以下造営庁職員、また少宮司以下神職と物忌（ものいみ）が正宮中重（なかのえ）にて拝礼。次に別宮遙拝所にて拝礼、その後、五丈殿（ごじょうでん）にて古式のままに造営庁側と神宮職員が対面して饗膳（きょうぜん）を囲みます。これは古くは、朝廷から造神宮使（ぞうじんぐうし）が使わされ事始めに臨んだ伝統的な宴席であります。

饗膳の後、祭典奉仕の権禰宜以下祭員は忌火屋殿（いみびやでん）前祓所で修祓。素襖（すおう）に掛明衣（かけみょうえ）を着けた小工（こだくみ）が五色幣をそれぞれ捧げ持ち、続いて白鶏（しろきかけ）、忌物、神饌辛櫃（しんせんからひつ）、祭典奉仕者などが山口祭場に向かいます。祭場では山の口に坐す神に神饌と生調（いきみつぎ）の白鶏が奉奠され、物忌がうやうやしく忌鎌にて草木を刈り初める所作を行います。物忌とは童男・童女のことで、幼い子供が祭典奉仕する点も遷宮諸祭の特徴といえます。

同日、皇大神宮御奉仕の後、同様に豊受大神宮においても祭儀が執り行われました。

饗膳

木本祭（このもとさい）

新殿の御床下に奉建する「心御柱（しんのみはしら）」の御料木を伐りまつる祭儀。心御柱に関する諸事は古来秘事とされ、口外されぬ事であります。山口祭とともに御治定戴いた同日の深夜、両宮において祭典奉仕員と物忌のみで執り行われます。今回は五月二日、皇大神宮は午後八時、豊受大神宮は深夜零時に斎行されました。

祭場での式次第は山口祭とほぼ同様であり、御料木は奉伐の後、両宮神域内にて遷御前の心御柱奉建まで清浄に安置されます。

木本祭は現在、山口祭と同日に斎行されるため「山口木本」と同一に扱われる傾向が見られますが、「両宮儀式帳（りょうぐうぎしきちょう）」によると、古くは日を異にして斎行されており、各々別の祭儀であります。山口祭は御料木を伐る山の神を和（なご）し祭る祭儀で、木本祭は御料木の奉伐にあたりその御料木の樹神を祭る祭儀となります。

木本祭

御杣始祭（みそまはじめさい）

陛下より御治定戴いた御杣山にて伐採作業を始めるにあたり、まず御神体をお納めする「御樋代（みひしろ）」の御用材を伐りまつる祭儀。木曽山中で執り行われ、御樋代木と選定された両宮の御料木二本が聳（そび）え立つ祭場に足場が組まれ奉拝席が設けられます。

今回は六月三日午前十時に斎行されました。まず、皇大神宮の御料木の木本に坐す神に神饌が奉奠され、作業の安全を祈念して祝詞が奏

上されます。拝礼の後、素襖に掛明衣姿の小匠が忌斧にて伐木の所作を行います。引き続き豊受大神宮の御料木の前でも同様の祭儀が斎行されます。

その後に杣人が「三ツ緒伐り」という古式の伐採法により皇大神宮、豊受大神宮の順に奉伐を行います。先に倒された皇大神宮の御料木の上に襷掛けとなるように豊受大神宮の御料木を伐り倒す古例となります。奉伐の後、切り株には御料木の梢を刺し杣人が揃って一礼します。これは御木の中間を戴いた感謝の一礼で「鳥総立」と呼ばれる杣人の作法と伝わります。

御杣始祭

伐り出された御料木は伊勢への奉搬に備えて皇大神宮三本、豊受大神宮三本に整えられ、それぞれの御料木の両端は菊の御紋章を型どり十六面に麗しく化粧掛けがほどこされ、畳表で丁寧に巻かれます。

御樋代木奉曳式

御杣山に定められた長野と岐阜両県、また奉搬の道中となる愛知県でも御樋代木は「御神木」と称し尊ばれ、篤い歓迎を受けながら伊勢へ鄭重に運搬されます。現在は陸路にて運ばれますが、以前は木曽川を利用した水運でした。その名残もあり、皇大神宮御料木は六月九日、陸路で一度宇治橋前に立ち寄ったあとに五十鈴川御側橋付近に、豊受大神宮は一日遅れて翌十日に、宮川に架かる度会橋に到着します。

皇大神宮の御樋代木は副従の権禰宜、宮掌、造営庁の技監、技師、小工を伴い五十鈴川の清流を川曳きにて遡り、神域の風日祈宮橋下流より参道へ曳き上げられます。

表参道にて大宮司以下神職がうち揃って迎えるなか、御樋代木は五丈殿に安置されます。

翌日、豊受大神宮の御料木は御木曳車（奉曳車）に乗せられて度会橋を出発。北御門より大宮司以下神職が見守るなか、神域内に曳き入れられ、皇大神宮同様に五丈殿に安置されます。

明年の令和八年に行われる予定の御木曳行事が伊勢町衆の奉曳行事であるのに対し、御樋代木奉曳式は「官曳」と呼ばれ、奉曳の主体が神宮であったが、昭和四十年の同式から旧神領民の行事として奉曳される事となりました。

御樋代木奉曳式（川曳き）

御船代祭

御神体は御樋代に奉安され、更に御船代という木製の器に納められます。その御船代の御料木を伐りまつる祭儀です。「延喜式」にも記載されているが、奉伐だけでなく、現行で遷御当年に行われる御船代奉納式と併せて行われていました。

祭典の日時は陛下の御治定を仰ぎます。前回は、皇大神宮は九月十七日午前十時、荒祭宮は同日午前十一時、月讀宮以下九別宮は同日正午、豊受大神宮は同月十九日午前十時、多賀宮は同日午前十一時、土宮以下三別宮は同日正午に執り行われました。

皇大神宮の祭場は風日祈宮橋南詰上流側の宮山祭場、豊受大神宮は山口祭と同様の宮山祭場で行われます。

両正宮の祭儀にて物忌が御木を伐る式を行う時刻を見計らって、長野・岐阜両県の御杣山では造営庁職員による伐木の儀が古式に則り執り行われます。

御木曳初式（おきひきぞめしき）

旧神領にあたる伊勢市の住民により、御造営の用材を両宮に奉曳する伝統行事「御木曳（おきひき）」の始めに行われる儀式。正宮や別宮の棟持柱（むなもちばしら）などにあてられる「役木（やくぎ）」という代表的な御用材を、ゆかり深い特定の町の住民が神域に曳き込み、「役木曳（やくぎびき）」とも称します。

御木曳初式（川曳き）

木造始祭（こづくりはじめさい）

御造営の工事開始に際し、作業の安全を祈り行われる祭儀。五丈殿で饗膳（きょうぜん）の儀を行い、同殿前に安置してある御木曳初式で奉曳された御料木に小工が忌斧を打ち入れます。

木造始祭

御木曳行事（おきひきぎょうじ）（第一次）

旧神領にあたる伊勢市の住民が二か月間にわたり御用材を両宮に曳き入れる盛大な行事。旧神領地の町内総出の晴れ舞台で、数日前に揃いの法被姿で二見浦に「浜参宮（はまさんぐう）」をして心身を清めて行事に臨みます。内宮の領民は木橇（きぞり）に御用材を積載して五十鈴川で「川曳（かわびき）」を行い、外宮の領民は巨大な御木曳車で「陸曳（おかびき）」を行います。

全国の「特別神領民」も多数参加し、期間中の伊勢の街は勇壮な掛け声と木遣音頭で包まれます。

前回は翌年の第二次御木曳行事とあわせて約二十万人が参加しました。

御木曳初式（陸曳き）

仮御樋代木伐採式（かりみひしろぎばつさいしき）

御神体を納める器を御樋代といいます。前年にすでに伐採された御木で作られる御樋代と御船代（御樋代を納める器）は新しい社殿に納められます。そのため、御神体を現在の正宮から新宮に遷す遷御の儀で用いられるのが仮の御樋代と御船代になります。

例え、仮であっても御木を伐採するにあたり、木の本に坐す神様をお祀りする祭儀が執り行われます。実際に、木曽の山で忌斧を入れ丁重に伐採されます。

「御用材のお祭り」の遷宮諸祭は、山の口に坐す神様に作業の安全を祈り、御杣山の木曽山で御樋代木が伐採され、伊勢に運ばれ、原木が用材に加工される儀式が粛々と行われるのです。

仮御樋代木伐採式

『神宮式年遷宮　ご奉賛のお願い』

遷宮は、遠い先祖と私たちをつなぐ「心」の絆として、途絶えることがないよう受け継いでいかなくてはなりません。かつては国費で行われていましたが、現在は国の安泰と国民の幸福を祈られる天皇陛下の大御心に、国民が募財という形で力を結集して行われています。

前回の神宮式年遷宮より十二年。世界に目を向けると、戦争や紛争が拡大し、コロナ禍を経て、我々人間の「心」の多様化がすすみ、世界を取り巻く環境が大きく様変わりしています。

今を生きる私たちは、一三〇〇年以上に亘って、伝統や技術が守り伝えられてきた神宮式年遷宮を通じ、「変わらないために変える」という大事な「心」を、未来に伝えていかなければなりません。

この度の、第六十三回神宮式年遷宮の御聴許を拝し、「心」を一つに、かけがえのない遷宮が古式通りに行われますよう、皆様のご理解とご奉賛をお願いします。

写真提供
神宮司庁広報室

参考文献
瑞垣　令和七年春季号　第二六〇号

発行者　神宮司庁　令和七年三月三十一日発行

栃木県神社庁新役員・監事・支部長・顧問・参与・協議員

令和七年九月一日現在・敬称略

庁長

中麿輝美（別表・上都賀・日光二荒山神社宮司）

副庁長

稲　寿久（有力・宇河・栃木縣護國神社宮司）
小林　靖（下都賀・星宮神社宮司）※

理事

荒井和宏（別表・宇河・宇都宮二荒山神社宮司）
佐野由希子（別表・安佐・唐澤山神社宮司）
石原敬士（有力・上都賀・古峯神社宮司）
柳田耕太（有力・芳賀・大前神社宮司）
小島教敬（宇河・八幡宮宮司）※
小幡正之（芳賀・鹿島神社宮司）※
荒井清勝（塩谷・安住神社宮司）※
和地秀美（南那須・示現神社宮司）※
星野芳典（北那須・八龍神社宮司）※
狐塚泰久（上都賀・高靈神社宮司）※
影山幹男（安佐・宇都宮神社宮司）※
尾花　章（足利・神明神社宮司）※
※は支部長

監事

樋山洋平（南那須・熊野神社宮司）
石原奈央子（有力・上都賀・古峯神社権禰宜）
宇賀神義宣（下都賀・鷲宮神社宮司）

顧問

吉田健彦（別表・上都賀・日光二荒山神社名誉宮司）
小林一成（下都賀・太平山神社名誉宮司）
人見昇三（北那須・温泉神社名誉宮司）
黒川正邦（下都賀・雄琴神社宮司）
阿部　憲（別表・宇河・宇都宮二荒山神社名誉宮司）

参与

上野喜則（宇河・白鷺神社宮司）
阿久津誠生（宇河・鸕鷀草神社宮司）
越口正一（芳賀・天満宮宮司）
堀口邦夫（芳賀・千代ヶ岡八幡宮宮司）
吉田正導（南那須・三箇神社宮司）
長倉　樹（南那須・鷲子山上神社宮司）
岡田和麿（南那須・戸隠神社宮司）
渡　健二（北那須・乃木神社宮司）
田邉一丸（上都賀・岩崎神社宮司）
宮田義丸（安佐・八坂神社宮司）
齋藤兵衛（安佐・沼鉾神社宮司）

協議員会

議　長　齋藤芳史
副議長　提箸照之

《宇河支部》
野﨑正之（宇都宮二荒山神社権宮司）
稲　信子（栃木縣護國神社禰宜）
萩野矢正美（天満宮宮司）
多田民男（高靈神社宮司）
阿部康夫（羽黒山神社宮司）
福田光弘（高靈神社宮司）

《芳賀支部》
柳田耕史（大前神社禰宜）
小森英世（闇靈神社宮司）
野澤功嗣（長沼八幡宮宮司）
小堀真洋（八雲神社宮司）

《塩谷支部》
一條勝彦（石上神社宮司）
小堀和則（星宮神社宮司）
荒井清律（安住神社禰宜）

《南那須支部》
樋山洋平（熊野神社宮司）
齋藤隆夫（八幡宮宮司）
滝口貴史（愛宕神社宮司）

《北那須支部》
人見文治（温泉神社宮司）
宇賀神直人（大田原神社宮司）
津田　宏（那須神社宮司）

《上都賀支部》
齋藤芳史（日光二荒山神社権宮司）

石原奈央子（古峯神社権禰宜）
田中教文（瀧尾神社宮司）
横瀬勝宣（賀蘇山神社宮司）
増渕文男（瀧尾神社宮司）
下妻大介（今宮神社権禰宜）

《下都賀支部》
栗原千早（胸形神社宮司）
荻田永子（三毳神社宮司）
小林宣彦（太平山神社宮司）
沼部博成（須賀神社宮司）
櫻木琢也（諏訪神社宮司）
宇賀神義宣（鷲宮神社宮司）

《安佐支部》
木村直樹（示現神社宮司）
髙橋由香（唐澤山神社権禰宜）
永澤宏昭（朝日森天満宮宮司）

《足利支部》
提箸照之（伊勢神社宮司）

栃木県神社庁教化委員会

令和七年九月一日現在・敬称略

委員長
小堀真洋（芳賀・八雲神社宮司）

副委員長
阿久津喜大（宇河・三祖神社宮司）
毛利晴喜（安佐・賀茂別雷神社禰宜）

総務部門
◎部門長
和氣洋誠（上都賀・日光二荒山神社権禰宜）
○副部門長
柳田晋作（芳賀・祖母井神社宮司）
黒川裕正（下都賀・雄琴神社禰宜）
☆部門員
矢部貴也（宇河・宇都宮二荒山神社権禰宜）
渡辺幸雄（上都賀・古峯神社権禰宜）
永島春美（塩谷・水神社宮司代務者）
齋藤隆夫（南那須・八幡宮宮司）
津田　亮（北那須・黒磯神社宮司）
林　靖大（下都賀・星宮神社宮司）
八下田勇人（安佐・賀茂別雷神社宮司）
櫻木理史（足利・八雲神社宮司）

調査研究部門
◎部門長
岩松史恵（塩谷・津島神社禰宜）
○副部門長
津田　宏（北那須・那須神社宮司）
田邉雅祥（上都賀・岩崎神社禰宜）
☆部門員
町井康祐（上都賀・日光二荒山神社禰宜）
篠崎博哉（宇河・宇都宮二荒山神社権禰宜）
関谷　秀（安佐・唐澤山神社権禰宜）
大柿文彦（宇河・日吉神社宮司）
野澤功嗣（芳賀・長沼八幡宮宮司）
今瀬瑞比古（南那須・健武山神社宮司）
海老沼敏亨（下都賀・野木神社宮司）
沼部泰幸（下都賀・安房神社宮司）

教化育成部門
◎部門長
柳田耕史（芳賀・大前神社禰宜）
○副部門長
上野敬則（宇河・白鷺神社禰宜）
早乙女晶子（安佐・赤城神社）
☆部門員
小林迪寛（宇河・宇都宮二荒山神社権禰宜）
三尾谷武人（南那須・白久神社宮司）
井上潤一（北那須・黒田原神社宮司）
田中教文（上都賀・瀧尾神社宮司）
和田晋典（上都賀・瀧尾神社宮司）
髙橋林之介（下都賀・太平山神社権禰宜）
小林誉史（下都賀・星宮神社禰宜）

編集部門
◎部門長
提箸照之（足利・伊勢神社宮司）
○副部門長
滝口貴史（南那須・愛宕神社宮司）
越口政典（芳賀・天満宮禰宜）
☆部門員
稲葉成孝（上都賀・日光二荒山神社権禰宜）
稲　信子（宇河・栃木縣護國神社禰宜）
阿部　汀（宇河・羽黒山神社禰宜）
佐藤実香（塩谷・皇宮神社権禰宜）
渡　伊吹（北那須・乃木神社権禰宜）
武内聡史（上都賀・報徳二宮神社禰宜）
菱沼拓己（下都賀・鷲宮神社宮司）

神話天孫降臨・三種の神器について

日本神話における「天孫降臨」

「天孫降臨」

【高千穂峰に天降った天照大御神の御孫】

光り輝く太陽のような存在で、神々の世界である高天原の統治者であった天照大御神は、現在では伊勢の神宮の内宮に祀られ皇室の祖先神として崇められています。その天照大御神の御孫にあたる邇々芸命に、豊葦原水穂国（日本）を高天原のような素晴らしい国にするよう天降るように命じました。

天降ることになった邇々芸命に、天照大御神は「勾玉」と「鏡」と「剣」の三種の神器を授け、高天原に住む五部族の天津神（思金神・天児屋命・天手力男神・天宇受売命・布刀玉命）が付き添いました。

豊葦原水穂国へ向かう途中、天上と地上の狭間に一柱の神様が現れた。その神様は、天と地を照らす国津神の猿田毘古神であり、邇々芸命が高天原より天降られることを聞きつけて道案内の為お迎えに上がったのでした。

こうして猿田毘古神に導かれて、邇々芸命と随行の神々は、（注・1）筑紫の日向の高千穂の霊峰に無事天降られ、その場所に太い柱を立て、千木を天高く掲げた壮麗な宮殿を建てて、お住まいになられました。

ある日、邇々芸命は山を司る神様、大山津見神の娘で木花之作佐久夜毘売という、それは美しい乙女に出会い結婚し、木花之作佐久夜毘売は一夜にして邇々芸命の御子をみごもりました。

ところが、別の国津神の子をみごもったと疑う邇々芸命にたいし、木花之作佐久夜毘売は身の潔白を示すため戸が一つもない産屋を作り、その中で子を産むことにしました。

そこで「もしお腹の子が邇々芸命様の子でないならば、私は焼け死ぬでしょう」と言って産屋に火を放ちました。

燃え上る産屋の中で、不思議な力に守られて木花之作佐久夜毘売は無事に子を産むのでした。

こうして疑いも晴れ、邇々芸命は木花之作佐久夜毘売と、末永く高千穂の宮で暮らしました。

（注・1）筑紫の日向の高千穂の霊峰

邇々芸命（ににぎのみこと）一行が天降ったという伝承地はいくつか諸説があり現在もはっきりしていない。宮崎県の高千穂峰や鹿児島県霧島山が有力な候補地とされている。

「天逆鉾」宮崎県・鹿児島県境の高千穂の峰に突き立てられたと言われる

代々受け継がれてきた皇位の証「三種の神器」

【天孫降臨がもたらす神宝】

三種の神器とは、天孫降臨の際に天照大御神が御孫の邇々芸命に授けた神宝で、八咫鏡・八尺瓊勾玉・天叢雲剣（草薙神剣）のことである。

①　八咫鏡

天岩屋神話において、天照大御神が岩戸の中にこもられた際、伊斯許理度売命が天香山から採取した銅を用いて作った鏡とされている。

天照大御神が自身の神霊として祀るよう邇々芸命に渡した。現在は、伊勢の神宮に祀られている。

②　八尺瓊勾玉

天岩屋神話において、天照大御神が岩戸の中にこもられた際に、玉祖命が作った勾玉とされている。現在は、皇室に天叢雲剣の分身とともに安置されている。

③　天叢雲剣（草薙神剣）

出雲で須佐之男命がヤマタノオロチを退治した際に、オロチの尾から出てきた剣とされている。天照大御神に献上されたのち、倭建命が相模国で野火攻めにあったときに、この剣で草を薙ぎ払って窮地を脱したことから、草薙神剣とも呼ばれるようになった。現在は、熱田神宮に祀られている。

参考文献　カラー版「イチから知りたい！　神道の本」
著　　者　神道学者　神道学博士　三橋　健（みつはしたけし）
発 行 社　株式会社　西東社
写真提供　神社本庁公式サイト　（https://www.jinjahoncho.or.jp/）
　　宮崎県観光協会
画像提供　神社検定公式サイト　（https://www.jinjakenteis.jp/）
　　三種の神器の画像は神社検定公式サイトより許可を得て掲載しております

三種の神器の豆知識

①「剣璽御動座」

天皇が行幸する際に侍従が三種の神器のうち剣（天叢雲剣）と璽（八尺瓊勾玉）を携えて随行すること。

②「八咫鏡」に先立って造られた「二つの鏡」

『日本書紀』の天岩屋神話の段には、次の記述がある。即ち石凝姥を以て冶工として、天香山の金を採りて、日矛を作らしむ。又、真名鹿の皮を全剥ぎて、天羽鞴（鹿の革で作ったふいご）に作る。此を用いて造り奉る神は、是即ち紀伊国に所坐す日前神なり。

『日前神宮』では日像鏡を日前大神として、また、『國懸神宮』では日矛鏡を國懸大神として、それぞれ御神体として祀っており、社伝には日矛とは「日像鏡・日矛鏡」の二体の御鏡であり、伊斯許理度売命が八咫鏡を鋳造するに先立ち、天香山から採取した金（銅）を用いて二体の御鏡を鋳造されたと伝えられている。

日前神宮

國懸神宮

日前神宮・國懸神宮（和歌山市秋月三六五）

紀伊國一之宮（旧官幣大社）両神宮を総称して「日前宮」と呼ばれている。

参考文献「全現代語訳　日本書紀（上）」

著　者　宇治谷　孟（うじたに　つとむ）

栃木県のお祭りと伝統行事

県指定無形民俗文化財　弥生祭（やよいさい）

日光二荒山神社（ふたらさんじんじゃ）

日光の春は弥生祭から、といわれるように、毎年四月十三日から十七日まで繰り広げられる弥生祭は、日光に絢爛たる春を告げる祭りです。

弥生祭は日光二荒山神社の大祭で、神護景運（じんごけいうん）年間（七六七年～七七〇年）に始まるといわれ奈良時代より千二百年以上の歴史を誇る伝統行事です、その昔は太陰暦弥生三月に行なわれたことから、弥生祭と呼ばれています。明治六年に太陽暦に改められた際に、祭日を現在のように変更したと言われています。

弥生祭は四月十三日、本社・滝尾・本宮の三社の神輿を本社拝殿に安置し神輿飾りの式を行う神輿飾祭（しんよかざりさい）を皮切りに、四月十七日の例祭までの五日間にわたって斎行され日光の春を華やかに彩ります。その間、例祭や渡御祭など神事に終始するもののこの祭りの見どころは、四月十六日の宵まつり及び十七日の例祭当日に付祭として、日光地区東町七台・西町四台・計十一台のヤシオツツジの造花で美しく飾られた花家体（はなやたい）が繰り出される「各町家体繰出し」です。

神輿飾祭

四月十七日、本社拝殿内にて厳かな例祭が執行されている午前十時半頃、東西両町の花家体が大鳥居前に集結。先番（はなばん）当番町を先頭に、花家体を多くの人々が力を合わせ引き、威勢のいい掛け声で参道を駆け上がり繰込み献備すると祭りは最高潮に達し、多くの観光客が魅了されます。

東西各町内の家体が境内に勢揃いすると、古式ゆかしい作法で各町の行事二名、頭役一名が他町を訪れて挨拶を交わす「名刺交換」が行なわれます。午後には家体繰り上げ伝達、続いて各町内家体が神社の拝殿周囲を、お囃子を奏でながら一巡する「神明廻（しんめいまわ）り」が繰り広げられ、拝殿前手打式後、本社から家体が繰り出され各町内に帰って行きます。

三神輿神橋渡橋

名刺交換

弥生祭付祭は、主な担い手が若者であること、服装が威儀を正した紋付き・袴姿や裃姿であること、「日光囃し」といわれるお囃子が演奏されること、次第にしたがい挨拶や口上を行う仁義があるなど注目すべき古風を残しています。県内でも珍しい若衆制度の伝統をとどめ、それに基づき運営しているこの行事はきわめて貴重であります。

古いしきたりを重んじ格式どおりに行事を進める中で、ひとつ間違うと町内単位の

花家体

「ごた祭り（ごた＝トラブル）」になることから「ごた祭り」「ケンカ祭り」とも呼ばれています。その緊張感と華やかさが混在する独特の雰囲気も、弥生祭の魅力と言えます。

国の重要無形民俗文化財
間々田のじゃがまいた　間々田八幡宮

「じゃーがまいたーじゃがまいたー！」の掛け声とともに、七つの自治会がそれぞれ蛇を担いで集落を練り歩き、悪疫退散、五穀豊穣を祈る祭りです。

小山市の間々田八幡宮を中心に行われるお祭りで、正確な由緒は不明ですが、地元に伝わる伝承では四百年ほど前からだといわれています。もとは旧暦の四月八日に行われていましたが、祭りの担い手が子供組、現在では小中学校の生徒が主体であることから、学校が休みの五月五日「こどもの日」に変更されています。（昭和四十八年頃）

蛇寄せ

水飲みの儀

名前の由来は、各町内や各家庭に「蛇が参った」という意味と、祭りの最中ぐるぐるととぐろを巻く様子から「蛇が巻いた」の二説あるそうです。

起源としては、八大龍王が龍水を降らせたという故事にちなみ、ほどよい雨による農作物の豊かな実りを祈願する八大龍王信仰が間々田の地にも伝わり、村人たちは龍を模した蛇体を作り、これをかつぎ回って、雨乞い・五穀豊穣・疫病退散を祈願するようになったとする「八大龍王信仰説」。もう一つは、かつて龍昌寺の住職であった法隆東林が、当時この地域を襲った日照りと疫病の流行による民衆の困窮を見かねて、八大龍王になぞら

蛇もみ

えた龍の模型を作り祈祷したところ、たちどころに雨が降り疫病もやんだので、それ以来各町内で蛇を作り、祭りを行うようになったとする「法隆東林の雨乞い疫病よけ説」があります。

現在、じゃがまいたの起源を示す説として町の人々に最も広く認識されているのは前者の「八大龍王信仰説」で、これは間々田八幡宮に「八龍神社」が祀られていることや、戦後になって蛇の先頭に「八大龍王」の旗を掲げて練り歩くようになった影響も大きいと思われます。いずれにしても、祭りの起源については、さらなる検証・資料の発掘が期待されるところです。

祭りは鎮守である間々田八幡宮の境内に、各町内の蛇体が集合する「蛇寄せ」から始まります。ここで神職からお祓いを受ける「修祓式」を行い、それぞれの口にお神酒が注がれた後、境内社である八龍神社に参ってから社殿を一周し、境内にある池に口を入れて水を飲ませる真似をさせる「水飲みの儀」をし、飲み終えた蛇はそれぞれの町内に戻り辻々を練り歩きます。このとき玄関に蛇を招き入れ、蛇の力によって厄除けと家内安全を祈願する家もあります。祈願を終えると、担ぎ手に賽銭を包むのが古くからの慣習です。祭りの終盤となる夕刻頃には「蛇もみ」が行われます。土煙をあげて巨大な蛇体が舞いうねる様は、祭りのクライマックスにふさわしい勇壮なものです。

御神酒の儀

このうち「蛇寄せ」や「修祓式」、「水飲みの儀」と呼ばれる行事は、昭和五年時点では確認されておらず（「下野間々田町の蛇がまいた」『民族芸術』三巻四号）時代とともに行われていったようです。まるで蛇が脱皮をしていくかのように、小山市間々田の発展を願い続ける間々田八幡宮の伝統行事。老若男女問わず、地元で親しまれています。

春渡祭・冬渡祭（おたりや）
宇都宮二荒山神社

宇都宮市の中心部に位置する二荒山神社で、「春渡祭」は、中世（鎌倉末乃至室町）から神霊（神輿）が巡幸し各家々に神霊を迎え、家内安全・無病息災を願う。江戸中期頃から、火防のご利益がある祭りという信仰が加わり、祭りの日は仕事を休み、針仕事をせず、風呂を焚かないなどの物忌みがなされました（近年では、その風習は消えている）また御旅所のかがり火に古神札・御守を焼く風習が、ドンド焼きに変わり、古神符守札・正月飾りを社殿東側の炉で焚き上げる行事になっていいます。春（一月）と冬（十二月）の年二回行われる長い歴史を持つ伝統的な祭りです。この祭りは、正月の締めくくりとし

発輿祭

て市民に親しまれており、宇都宮の冬の風物詩となっています。

春渡祭の起源は、承和三年（八三八）に遡るとされており、二荒山神社の御神体が「下之宮」から現在の社殿「明神山」へ遷座されたことに由来します。神輿の渡御は十二月十五日と一月十五日の二回に分けて行われ、夕刻から夜通し行われていたことから「渡り夜」と呼ばれ、それが転じて「おたりや」となりました。

神輿渡御祭

神輿行列が市内（下乃宮―大通り―ＪＲ宇都宮駅で折返し―大町通り―日野町通り―オリオン通り―東武駅―大通り―神社）を巡幸する行事で、始発と帰社の祭典及び御旅所（下乃宮）での祭典が行われる。出御祭には神輿に神霊を遷す遷霊と、還御祭には神輿から神霊を神社に遷す遷霊の儀式がある。また御旅所祭では祭典の中に田楽舞が奉納されます。

堀米の田楽舞（市指定文化財）

現在の田楽舞が行われるようになったのは、江戸時代文化年間のころといわれています。初夏に五穀豊穣を祈念する祭りを行うようになり、その結果、田楽舞を取り入れ、田舞祭（たまいさい）を行うようになったものと思われます。二荒山神社では、中世に二十年ごとに式年造宮が営まれ田楽舞が行われていました。現在の田楽舞は、江戸時代文化年間に旅芸人が日光で演じたものを模倣し、それを二荒山神社の御神領であった堀米の六軒の農家に伝授させたものです。

踏掛（ふんがけ）と呼ばれる竹棒の下部に横木を付けたものを立て、田楽人は裁着袴（たつつけばかま）に陣羽織のような上衣、白足袋に草履、赤い布を垂らした丸笠をかぶります。笛とササラを持つ２人と銅拍子、鞨鼓（かっこ）を持つ二人が両脇に向かい合い、中央にササラ、柄太鼓を持った舞の二人が立ち、歌とに合わせて竹で組んだ踏掛に交互に歩み寄っては足をかけるというものです。田楽舞は、祭りの伝統を象徴する重要な行事で、参拝者を惹きつける見ごたえのある舞です。

田楽舞

この祭事は、一月（十二月）の「初の子午の日」（初めに来る子の日または午の日）であったが、明治六年太陽暦変更に伴って十五日に定められました。

春渡祭　一月十五日・冬渡祭　十二月十五日

午後四時三十分　出御祭（社殿）
午後五時　御旅所祭（下之宮）
午後五時三十分　神輿渡御
（一月は上町より下町、十二月は下町より上町）
午後七時　還御祭（社殿）

伊勢の神宮と氏神さまのお神札をおまつりしましょう！

お神札の種類

神宮大麻

天照大御神さまを御祭神とする伊勢の神宮のお神札です。「天照皇大神宮」の神号が謹書されています。氏神さまを通じて神職等により各家庭に頒布される地域もあり、各神社の授与所でも頒布されています。日本の「総氏神さま」である天照大御神さまの御加護により、日本全国の家庭や事業所をお守りいただいております。

祈願札（祈祷札）

神社で家内安全や厄祓い、初宮詣、七五三詣など、神さまへお願い事をしたときに授与されるお神札です。

お神札を祀る宮形と神棚

わたしたちの生活を見守る宮形は、その壮麗な形から

Q①
初めてお神札を受けたのですが、どのようにお祀りしたらよいですか？

A〈神棚がある場合〉
リビングなどで、清潔で目線より高い場所にお祀りします。また、神棚を置く方角は、「北を背に南」か「西を背に東」を向けましょう。

〈神棚を据え付けることが難しい場合〉
家具の上などにお祀りしても大丈夫です。ライフスタイルに合った方法でお祀りしましょう。

お神札は神さまが宿っているみしるし

神社のお神札

お住まいの地域の守り神（氏神さま）である神社を「氏神神社」、地域に限らず好きな神社や特に信仰する神社を「崇敬神社」といいます。崇敬神社はいくつあっても大丈夫です。

かまどの神さま 三宝荒神のお神札

荒神は竈神とも呼ばれ、主に台所を中心とした家の中の火を扱う場所におまつりする神さまのお神札です。

継承されてきた伝統の美しさがあります。皆様も神棚をおまつりして神さまに日々の感謝を捧げましょう。

Q②
お神札の薄紙は剥がしても良いのですか？

A
はい。大丈夫です。薄紙はお札が汚れないようにするためのものです。お祀りする時は剥がしてお祀りしましょう。

Q③
お神札は一度いただけば良いのですか？

A
お神札は毎年取り換えて、新しい年を迎えてください。新年を迎えて、気持ちが新たになるように、お神札を新しくすることは、神さまが新たなおちからで私たちをお守りくださるということなのです。前の年におまつりしていたお神札は、感謝の気持ちを込めて神社へ納めてください。

令和８年 厄年早見表（年齢は数え年）

男　性

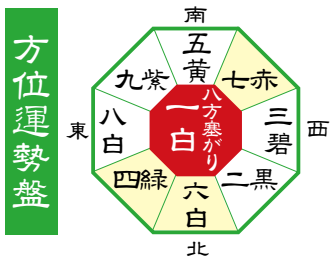
前厄	本厄	後厄
24 歳 平成 15 年生 (2003)	25 歳 平成 14 年生 (2002)	26 歳 平成 13 年生 (2001)
41 歳 昭和 61 年生 (1986)	42 歳 昭和 60 年生 (1985)	43 歳 昭和 59 年生 (1984)
60 歳 昭和 42 年生 (1967)	61 歳 昭和 41 年生 (1966)	62 歳 昭和 40 年生 (1965)

女　性

前厄	本厄	後厄
18 歳 平成 21 年生 (2009)	19 歳 平成 20 年生 (2008)	20 歳 平成 19 年生 (2007)
32 歳 平成 7 年生 (1995)	33 歳 平成 6 年生 (1994)	34 歳 平成 5 年生 (1993)
36 歳 平成 3 年生 (1991)	37 歳 平成 2 年生 (1990)	38 歳 昭和 64 年 / 平成元年生 (1989)
60 歳 昭和 42 年生 (1967)	61 歳 昭和 41 年生 (1966)	62 歳 昭和 40 年生 (1965)

令和８年 戌の日早見表

1 月	12 日(月)祝日・24 日(土)大安
2 月	5 日(木)大安・17 日(火)
3 月	1 日(日)・13 日(金)・25 日(水)
4 月	6 日(月)・18 日(土)・30 日(木)
5 月	12 日(火)・24 日(日)大安
6 月	5 日(金)大安・17 日(水)・29 日(月)
7 月	11 日(土)・23 日(木)
8 月	4 日(火)・16 日(日)・28 日(金)
9 月	9 日(水)・21 日(月)祝日
10 月	3 日(土)・15 日(木)・27 日(火)
11 月	8 日(日)・20 日(金)
12 月	2 日(水)・14 日(月)・26 日(土)

令和８年 方位除早見表

一白	四緑	六白	七赤
昭和 20 年	昭和 17 年	昭和 15 年	昭和 14 年
昭和 29 年	昭和 26 年	昭和 24 年	昭和 23 年
昭和 38 年	昭和 35 年	昭和 33 年	昭和 32 年
昭和 47 年	昭和 44 年	昭和 42 年	昭和 41 年
昭和 56 年	昭和 53 年	昭和 51 年	昭和 50 年
平成 2 年	昭和 62 年	昭和 60 年	昭和 59 年
平成 11 年	平成 8 年	平成 6 年	平成 5 年
平成 20 年	平成 17 年	平成 15 年	平成 14 年
平成 29 年	平成 26 年	平成 24 年	平成 23 年
令和 8 年	令和 5 年	令和 3 年	令和 2 年